

うに、多数民族の言語を標準語とする言語政策では、なおさら多文化主義の実現は難しくなるだろう。

冒頭に述べたように、本書全体を見渡して魅力的なのは、統制、転換、公共性といった言葉では捉えきることができない現実の複雑さへの目配りである。軍政のくびきから逃れた人々の行動が、ミャンマーの何を変えてきたのか、これから何を変えするのか、さらなる分断に向かうのか、統制へと逆行するのか、思わぬかたちで共生への道を探り当てるのか、こうしたことを考える上で、本書がよい出発点になるはずである。

こうした問題意識をさらに発展させるための課題とは何だろうか。本書のように、公共性や公共圏を広く定義すると（「国家に批判的になりうる言説と生産と流通の場」）、現在のミャンマーでは、あらゆるところに公共圏が発生していることがわかる。軍事政権が約50年間にわたって市民社会を強権的に抑え込んできたのだから、その統制が緩んで、市民の多様な声が発せられるようになるのは当然のことかもしれない。

ただその一方で、公共圏は国家の統制が緩和されると自動的に発生するものではなく、国家から自律的な組織だけを意味するわけでもない。ハーバーマス流の市民社会論に従えば、公共圏は世俗的で共和的なものである。この特質はミャンマーの公共性や公共圏の事例には当てはまらない。本書で扱われている公共圏は、世俗的でもなければ構成員間の平等な関係だけで成り立ってもいない。どの章が扱う公共圏も、その内部の社会関係は、宗教的な上下関係があったり、民族という疑似的な血縁関係にもとづいていたり、権力関係が格差を規定していたり、暴力を内包したりする人のつながりである。公共性という言葉でまとめるには中身が多様だろう。ミャンマーの公共性や公共圏が持つ思想的背景や特質については、もっと踏み込んで議論できそうである。

場合によっては、公共性や公共圏という概念を分析概念としては使用しないというものひとつの選択かもしれない。本書でも引用されているコマロフ夫妻の言葉、すなわち、市民社会とは「社会的想像力をかき立てるイデオロギー的比喻」に過

ぎない、という指摘は、評者も常々感じるところである。公共性、公共圏、市民社会という言葉は便利な反面、そこに含まれる現象が大きすぎて、分析的に有意義な発見をもたらさないときがあるからだ。

同時に、ミャンマーでは、この10年間に、公共性、公共圏、市民社会という言葉が使われるようになり、社会的な行動や運動を動機づける理念にもなっている。この理念としての公共性に検討を加えることも必要だろう。

民主化の進展と経済成長によって、ミャンマー社会はめまぐるしく変化している。研究がそれに追いつくのに苦勞する時代になった。変化のスピードや、変化の不確実性といったものをとらえるための新しい概念が必要となり、またその一方で、新しい概念の分析もまた必要である。分析概念と概念分析、それぞれを考えるうえで本書はさまざまなヒントを与えてくれる。

（中西嘉宏・京都大学東南アジア地域研究研究所）

橋本 彩.『ラオス競漕祭の文化誌——伝統とスポーツ化をめぐる』めこん, 2020, 286p.

毎年、出安居祭の翌日に、ラオスの首都ヴィエンチャンでは競漕祭が盛大に開催される。このヴィエンチャンの競漕祭に関して、1990年代後半から2000年にかけて「伝統」をめぐる論争が起こった。そこでは、競漕に「スポーツ」的要素が侵入したことにより、競漕祭の「伝統」が損なわれたとの主張がなされ、その際、伝統を阻害する要因としてしばしば言及されたのが、「キラー（ラオ語でスポーツの意）」と「タイ」であったという（pp. 9-10）。

本書は、ヴィエンチャンの競漕祭が、社会との相互作用の中でどのような歴史的変容を遂げてきたのか、「伝統」、「スポーツ」、「タイ」の3つのキーワードをもとに明らかにし、ラオス競漕祭の文化誌を描こうとするものである。

本書の構成と各章の内容

本書は著者が2014年10月に早稲田大学大学院人間科学研究科に提出した博士論文をもとになっている。序章、第1部（第1章、第2章）、第2部（第3章、第4章）、第3部（第5章、終章）から成り、フランス植民地時代から現在まで時系列で構成されている。以下、本書の概要を示す。

序章では、はじめに競漕祭における「伝統」と「スポーツ」の関係について、スポーツ人類学など関連分野の先行研究を検討し、本書の意義が示される。一方、ラオスの競漕祭についての研究では、シャルル・アルシャンボーの『ラオスにおける舟競漕：ある文化複合』（1972年）を中心に検討され、アルシャンボーがヴィエンチャン競漕祭の伝統儀礼として記録したものが、フランス植民地時代につくられた可能性があることなどが指摘される。

第1章では、ラオス刷新運動期、1941年に創刊された『ラーオ・ニャイ』新聞から、植民地時代の競漕祭について分析がおこなわれる。『ラーオ・ニャイ』に初めてヴィエンチャンの競漕祭についての記事が登場したのは、1941年10月であった。それ以前に大規模な競漕祭の記録が存在しないことなどから、著者は競漕祭がラオス刷新運動期にラオス人のアイデンティティ喚起を目的に、伝統復興の一環として創造された可能性が高いとする。また当時、近代語彙に関する議論が『ラーオ・ニャイ』紙上で活発に展開され、その中で、ラオ語で「スポーツ」を意味する「キラー」という語も登場している。しかし、競漕祭の記事において「キラー」が用いられることはなく、競漕祭はスポーツとは無縁のものであった。

第2章では、アルシャンボーが1953年に実施したヴィエンチャン競漕祭の調査記録が検討される。アルシャンボーが記述した儀礼には、船の漕ぎ手の衣装、守護靈召喚の文言など、植民地時代以降に創られたと考えられる点が存在する。特にアルシャンボーが基部に学識ある伝統が存在すると評した守護靈の召喚句については、1940年代以降に創作、ないしは再編され、復興されたものであるとの見方が示される。

第3章では、ラオス王国時代の競漕祭に焦点が当てられる。競漕祭がラオスの伝統文化に取り込まれていく中で、外国人の目を意識した政府によって、卑猥なお囃子など、「ラオスの美しい伝統文化」として好ましくない要素が排除されていく。一方、王族の参列により競漕祭の規模が拡大すると、運営管理にスポーツという視点が入るようになる。しかし、競漕祭の伝統行事としての価値が高まる中で、「伝統スポーツ（キラー・パペーニー）」という言葉が登場したように、1970年代前半においては、「スポーツ」は「伝統」を害するものとする価値観は存在せず、「歓迎されこそすれ忌避される存在ではなかった」（p.118）。

第4章では、1975年の社会主義革命直後から1999年までの競漕祭について考察される。革命後、競漕祭は祖先から継承されてきた伝統的な祭りであると同時に、「団結力を高めるための水上スポーツ」として推進される。団結が強調される中「スポーツ」の側面が重視され、短い舟で競漕する「フーア・カーブ」という新しいカテゴリーが設けられる。競漕種目が国家スポーツ競技会に加わると、「フーア・カーブ」は「フーア・キラー（スポーツ舟）」と同義となり、競漕祭における「スポーツ」の色彩が強まっていく。一方、従来の長い舟は「フーア・パペーニー（伝統舟）」と認識されるようになる。

1990年代には、観光資源としての伝統文化に注目が集まる中で、フーア・カーブは競漕祭から締め出され、長い舟の形状に関しても規定が定められるなど、伝統回帰の動きが見られる。しかし、東南アジア競技会などの競技種目として競漕が定着するにつれ、競漕は「ラオスが誇る祖先から受け継いできた『スポーツ』の1つ」（p.155）とされ、状況に応じて伝統とスポーツのバランスを使い分ける態度が形成されていった。

第5章では、伝統的な舟の形状をめぐる論争と2000年の競漕祭におけるカテゴリー分化の経緯が検討される。1990年代後半より、フーア・スードと呼ばれる「スポーツ」としての勝利を重視した、新しい形状の舟を導入した村が競漕祭の優勝を独占するようになる。そうした中、フーア・スードと伝統舟とで競漕することへの不満が高まり、競

漕祭のカテゴリー分化に至る。しかし伝統保持を主張する村のねらいは競漕の「公平性」にあり、このことは人々の意識において、競漕祭が勝敗を追及するスポーツ競技会となっていることを意味していた。また、フーア・スードを使用するのはメコン川沿いの村であるのに対し、伝統舟を使用するのはナムグム川沿いの村という明確な地域差が存在した。フーア・スードは「タイの舟」と認識されていることから、伝統論争の背景には、各地域の人々のタイに対する意識の違いも反映しているとされる。一方、アルシャンボーが重視した競漕祭に係る儀礼が、伝統論争の中で話題となることはなかった。

終章では、全体の梗概から本書の結論を導き出した上で、今後の課題と展望が述べられる。

コメント

評者の研究テーマはラオスの国民国家建設であるため、ここではラオス近現代史研究における、本書の意義について検討したい。

本書の第一の貢献は、文献資料とフィールドワークをもとに、1940年代から約70年にわたるヴィエンチャン競漕祭の歴史を描き出したことにある。ラオスを対象とする研究は未だ少なく、特に文献資料に依拠した研究は十分な蓄積があるとはいえない。そうした中、新聞記事の分析を中心に競漕祭における「伝統」と「スポーツ」の関係の変遷を描き出した本書は、ラオス近現代史の一面を明らかにした貴重な研究といえるだろう。

第二の貢献としては、ラオス競漕祭研究の第一人者といえるアルシャンボーの研究を批判的に検討し、競漕祭研究に新たな視点を提供したことが挙げられる。1953年の儀礼についてのアルシャンボーの記録は、著名なラオス人研究者が2007年に競漕祭儀礼を調査した際に、彼の記録通りに儀礼が実施されていなかったことを嘆くなど、研究者の間で「学識者内で伝わる伝統」として認識されてきたといえる。これに対し、著者はアルシャンボーがヴィエンチャンの伝統的儀礼として記録したものが、1940年代以降に創出された可能性が高い点を指摘している。さらに、アルシャンボーの研究においては等閑視されていた、舟の漕ぎ手や

舟に関する物質文化的情報に注目することで、知識人の考える「伝統」と祭りに参加する一般の人々の「伝統」とのずれを浮き彫りにしている。

このように、本書はラオス競漕祭研究だけではなく、ラオス近現代史の新たな側面を明らかにした意義深い研究となっている。国民国家建設過程における伝統の創出は世界各地で見られてきた現象であり、本書の研究は、他地域の研究にも応用可能といえるだろう。しかし、いかに優れた研究であっても問題点は存在する。以下、評者の気になった点をいくつか指摘しておきたい。

一点目は、国民国家としてのラオスの形成期を対象としているにもかかわらず、ナショナリズムとの関係が十分に検討されていないように思われることである。本書では、国民名は「ラオス人」、民族名は「ラオ人」と区別するとしている。しかし、多民族国家であるラオスにおいて、「ラオス人」の範囲は時代ごとに様ではなく、本書のような約70年にわたる長期間を対象とする研究の場合、「ラオス人」の指す意味内容の変遷にも注意を払う必要がある。

内戦期、ラオス王国において「ラオス国民」の範囲はラオ人が中心であったといえるのに対し、敵対するパテート・ラオでは、多民族からなるラオス国民が強調されていた〔矢野 2013: 279-282〕。王国時代、皇太子夫妻が参列するなど競漕祭は国の伝統行事となる。そして、1975年にラオス人民民主共和国が建国されると、競漕祭は「我々ラオス人が祖先から受け継いできた美しい伝統を継承するために行うもの」(p. 126)であり、「村や町の安全を脅かし、政治、経済、新しい文化を混乱させる敵の各策略を破壊し、国民を集め、心を1つにし、結束を高めるために開催する」(pp. 126-127)とされた。パテート・ラオにおいて「我々ラオス人の祖先」とした場合、「祖先」にはラオ人だけではなく少数民族も含まれる〔同上書: 232-233〕。このことに鑑みれば、1975年以降、国民の団結を促進する行事とされた競漕祭の担い手に何らかの形で少数民族を取り込むなどの変化があった可能性は否定できない。また、競漕祭で団結が強調された要因として、著者はタイとの関係悪化を挙げているが、建国当初、ラオス人民革命党が全国を

完全に掌握できていたわけではなく、反政府勢力が各地で活動し、国内の治安は不安定な状況が続いていた。反政府勢力には内戦期に特殊部隊が結成されたモン族の兵士も多く含まれており、多民族からなるラオス国民の団結は引き続き、重要課題となっていたのである。そうした中、ラオ人の伝統行事である競漕祭が「我々ラオス人が祖先から受け継いできた美しい伝統」とされた意味について、国民統合との関係からの分析があっても良かったように思う。

二点目は、内戦期のパテート・ラオ側の動きに触れられていないことである。もっとも、パテート・ラオの支配領域が北部山岳地帯中心であったことから、ヴィエンチャン競漕祭をテーマとする本書において、パテート・ラオを考察の対象としないのは当然ともいえる。しかしながら、ラオス人民民主共和国は、パテート・ラオの勝利により誕生した国家であり、その政策や思想は内戦期の革命闘争に深く根ざしている。実際、1966年にはラオス愛国戦線（パテート・ラオの大衆政治組織）のスポーツ部隊が新興国競技大会（GANFEO）に派遣され〔Creak 2015: 162–163〕、解放区で出版された文法書や辞書にも「キラー」の語が掲載されている。このことは、パテート・ラオの革命闘争においてスポーツが重要な意味を待っていたことを示すものといえる。伝統に関しても、「祖先から受け継いできた美しい伝統」と類似した表現は、パテート・ラオの出版物に頻繁に見られるものであり、さらに、「諸民族の平等と団結」はパテート・ラオのスローガンでもあった。したがって、革命闘争における「伝統」や「スポーツ」の位置付けや、それらと「諸民族の団結」というスローガンとの関係を分析することは、1975年以降の競漕祭における「スポーツ」と「伝統」の関係を考察するうえでも重要な意味をもつといえる。

以上、評者の気づいた問題点を指摘したが、これらは欠点というよりは今後の課題というべきものであり、先述の本書の価値を少しも損なうものではない。本書の研究のさらなる発展に大いに期待したい。

（矢野順子・愛知県立大学外国語学部）

参考文献

- Creak, Simon. 2015. *Embodied Nation: Sport, Masculinity, and the Making of Modern Laos*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 矢野順子. 2013. 『国民語の形成と国家建設——内戦期ラオスの言語ナショナリズム』東京：風響社.

三重野文晴（編）.『変容するASEANの商業銀行』アジア経済研究所, 2020, ix+203p.

ASEANの経済システムの四半世紀は、国際経済の変動に翻弄され大きな変革に直面せざるを得ない試練の時期であった。とりわけASEAN諸国の商業銀行は、1997年アジア金融危機や2008–2009年世界金融危機などの国内外の経済ショックの直撃を受け、2015年にはASEAN経済共同体結成宣言や各国政府の金融・銀行部門改革などの地域的・各国別の政策対応の結果、経営環境の大きな変動にさらされ、市場構造の再編と経営手法の変更を迫られてきた。

本書は、ASEANの商業銀行部門が2000年代以降のこれらの経営環境の変化の中で、経営戦略をどのように変容させてきたかを実体経済の変化との関係に留意しつつ、その意味を追求しようとしている。四半世紀という比較的長期における度重なる経済変動の中で発展途上国の金融機関がどのように対応し経営を持続してきたかという開発金融論の大きな課題に正面から取り組んだものであり、ASEAN諸国金融機関の事例研究としても財務データの分析やそれぞれの市場調査に基づいたものとして高く評価できる。

各章の概要

本書は7章立ての構成になっているが、マクロの金融環境や地域横断的な視点からASEAN商業銀行部門の変化を比較分析する第1部（第1章から第3章まで）と、シンガポール、インドネシア、タイ、フィリピンの商業銀行の事例を紹介する第2部（第4章から第7章まで）からなる。

第1章「序論——ASEANの商業銀行の変容」（三